

# 欧米諸国における「近代化」

山口県公立中学校教諭

## 欧米諸国における「近代化」を学ぶ 二つの意味

新学習指導要領によって歴史的分野の時代区分は、古代まで、中世、近世、近代、そして現代と五つとなった。これを大きく二つのまとまりに分けるとしたら古代から近世までの前近代と、近代以降となる。授業時数からみても、この二つの大きなくくりではほぼ半分ずつとなる。平成24年度用『社会科 中学生の歴史』（以下、新教科書）で近代の指導例を考えてみよう。今回扱う第5部1章は、単に近代の導入にあたるというだけでなく、歴史的分野の学習の後半の導入と位置づけることができる。そこで本章を扱う単元は、近代以降の歴史の理解を促すための、前近代とは異なる歴史のとらえ方を学ぶための単元として位置づけたい。

### (1) 「イギリスで始まった『近代化』」という見出しの意味～中核と周辺を理解

新学習指導要領に示されている大項目が、近代以降「～の日本と世界」と記述されていることからわかるように、近代以降の日本の歴史の動きは、世界の歴史の動きと一体的に理解していく必要がある。おもに東アジア諸国の動きを視野に入れておけばよかった前近代とは明らかに異なる理解の仕方が求められるのである。この違いの背景には、欧米諸国の近代化に端を発した世界の一体化がある。地球上のすべての国や地域が、他国の動きと

無関係ではいられなくなったのである。そして、重要なのは、その影響の及ぼし方が相互に平等ではなく、主導権を握っている国や地域（中核）とその影響を受ける国や地域（周辺）に分かれるということである。どこの国や地域が中核であることを意識することによって、その時代ごとの世界全体の動きや、国際情勢の中での日本の立ち位置を把握しやすくなる。

もう一つ重要なことは、近代以前の東アジアにおいて中国が不動の中核であり続けたのとは異なり、近代以降の世界史において中核は移動するということである。大まかにはイギリスからアメリカへのシフトということである。新教科書にはおなじ「アメリカ」という国名で記述されているが、ペリーを派遣し日本を開国させたアメリカと、真珠湾攻撃によって日本と戦うことになったアメリカでは、国際的な位置づけが全く異なるということである。そのことを理解させるためにもまずは本単元において、後に「パクス＝ブリタニカ」を築いたイギリスの存在を意識させることが大切であると考えられる。

### (2) 新たに加わった「変わる欧米諸国」～近代を学習するうえでのキーワードの理解

本章の冒頭には、以前の教科書にはなかった次のような記述が加わっている（下線筆者）。

#### 変わる欧米諸国

日本では江戸時代にあたる17～19世紀は、ヨーロッパが大きな変化をとげた時代でした。産業では、工業化が進んで資本主義社会が生

まれました。政治では、身分制が廃止されて自由で平等な「市民」たちがつくる「市民社会」に変わり始めました。これまで国王と支配身分だけが政治を進めてきたのに対し、市民たちが主権者である「国民」となって、議会を通じて国家を運営するようになりました。こうした動きを、「近代化」とよんでいます。

新教科書の本文中にわずか8行で示してあるこの記述に、近代以降の歴史を理解するためのキーワードの多くが集約されている。

- ・工業化 ・資本主義社会
- ・市民 ・市民社会 ・国民 ・近代化

近代以降の歴史は、イギリスを起点として欧米諸国で生み出された近代国家システムが中核から周辺へと拡大していく歴史ととらえることができる。授業者は、これらのキーワードを、単に欧米諸国における近代化を理解するためのものではなく、我が国における開国以降の歴史を理解するためのキーワードととらえておく必要がある。とくに上記の下線部の記述については、これまでどちらかという絶対王政が打倒された（国王が排除された）という視点から授業で取り扱ってきたが、むしろ重要なのは、基本的にその国に住むすべての市民が政治の主体者である「国民」として意図的にとらえなおされ、「国民」によって国家が構成されるようになったという点である。つまり「国民」とは、何らかの意思によって生み出されたものであるということに気づかせることが重要なのである。また、意図的に生み出されたがゆえに「国民」を生みだした主体者が「国民」にどのような価値観を共有させるかによって、「国民」と「国民」でないものの境界線は意図的に変えることができるということに気づくことが重要である。このような「国民」についての理解があれば、市民革命と明治維新の違いや、アメリカの南

北戦争における南部と北部の違い、また、明治以降形成される「一等国民」としての意識とアジア諸国に対する差別意識の問題等が、「国民」をどう生み出し、それ以外のものとの境界線をどこに引くかという問題として理解することができる。授業者が、近代以降の授業をつくる際に、常に底流に「国民」に焦点化した課題意識を持っておくことが、「近代とはどのような時代か」また「現代とはどのような時代か」という、第5部、第6部の学習の最も本質的な課題に迫るための一つの手段であると考えられる。そして、生徒には、今の自分たちの立ち位置が自然に生み出されたものではなく、先人の努力によって生み出されたものであることや、それゆえ国民としての権利と責任の自覚が必要であることに気づかせて公民的分野の学習へとつないでいきたい。

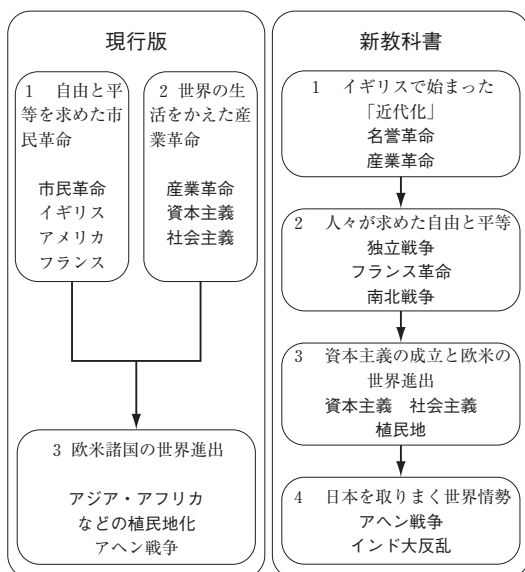
## 2 時系列に沿って学ぶことの利点

下の表は、現行版の教科書と新教科書の、欧米諸国の近代化と世界進出を扱った部分の構成を比較したものである。

教科書	現行版	新教科書
節・章 タイトル	欧米諸国の衝撃と日本	欧米諸国における「近代化」
1	自由と平等を求めた市民革命	イギリスで始まった「近代化」
2	世界の生活をかえた産業革命	人々が求めた自由と平等
3	欧米諸国の世界進出	資本主義の成立と欧米の世界進出
4～	*ここから国内の動きに関する記述 4 ベリー米航から開国へ 5 倒幕運動と民衆の願い	日本を取りまく世界情勢

それぞれの教科書の項（見開き2ページ）の関係を示すと次頁の図のようになる。

現行版では、1と2で欧米圏で起こった変



化について説明した後に、3で欧米諸国の近代化が世界全体に影響を及ぼしたことについて説明がなされている。授業後にこのような構造が生徒の頭の中にイメージされればよいのであるが、多くの社会科教員が経験しているように、往々にして、生徒は、教科書に記述してある順序を、歴史的事象がおこった順序として記憶してしまうのである。つまり、現行版の教科書では、「フランス革命の後にイギリスで産業革命が起こった」と無意識のうちに刷り込まれてしまう可能性がゼロではないということである。これに対して、新教科書では欧米圏での変化からインドの大反乱までがほぼ時系列に沿って記述してある。新教科書を順に読んでいけば、イギリスの市民革命→イギリスの産業革命→アメリカ独立戦争→フランス革命という出来事が、時系列に沿って認識されていくことになるのである。

以下に新教科書の特徴を生かした単元構成および授業の展開例を示す。

### 3 授業の例

#### (1) 単元構成

以下に示すのは、欧米諸国で起こった近代化と世界進出の経緯とその結果について、イギリスの国際的な位置づけを意識しながら理解させていくことをねらった単元構成である。

時	主発問	ねらい
1	なぜイギリスで世界初の産業革命が起こったのか。	世界初の産業革命がイギリスで起こった要因について考察させることを通して、ヨーロッパ諸国の中でイギリスが優位な位置にあったことに気づかせる。
2	独立宣言と人権宣言の共通点は何か。	植民地アメリカがイギリス本国から独立した背景について考察させることを通して、自由、平等や国民主権という考えに基づく近代国家が生み出されたことを理解させる。
3	第1回万国博覧会がイギリスで開催されたのはなぜか。	万国博覧会が開催された背景について考察させることを通して、資本主義の仕組みと、原料供給地兼市場としての植民地を獲得する政策がとられたことを理解させる。
4	イギリスが清にアヘン戦争をしかけたのはなぜか。	アヘン戦争の背景について考察させることを通して、近代化の進んだ欧米諸国とそれ以外の地域の格差について理解させる。

#### (2) 授業の展開例 (2時間分)

##### 【1時間目】

##### ①導入

新教科書p.135の⑥「鉄道の開通」や⑦「産業革命の導き手－蒸気機関」に注目させ、蒸気機関が動力として使用されることによって、大量の商品を安く生産することが可能となったことを説明する。平成24年度用『中学校社会科地図』（以下、新地図帳）p.41で、マンチェスターの位置を確認し、ここが産業革命の起点となった綿織物工業の中心地であったことを説明する。

##### ②展開

そのうえで主発問「なぜイギリスで世界初の産業革命が起こったのか」を投げかけ、教科書の記述を手掛かりに各自で考えさせ、意見を出させる。

(予想される生徒の反応)

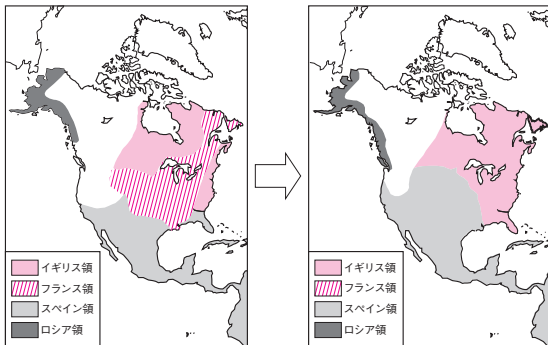
・イギリスでは1688年に名誉革命が起こっており、産業の担い手である商工業者の意見が政治に反映されるよう

になったから。(新教科書p.134 12～17行)

・イギリスは綿製品を西アフリカに輸出して奴隷と交換し、さらに奴隷を西インド諸島やアメリカ大陸の大農園へ砂糖や綿花を生産するための労働力として転売し利益を上げていたから。(新教科書p.135 6～9行)

・イギリスでは人気の高い綿織物を安く大量につくるために、新しい技術が開発されたから。(新教科書p.135 10～14行)

ここで次の資料を提示し、イギリスとフランスとの間で何が起こっていたのかを考えさせる。



1754年以前のアメリカ

1763年以降のアメリカ

この資料は七年戦争(アメリカではフレンチ＝インディアン戦争)前後のアメリカでの勢力範囲の変化を示したものである。この戦争について説明するのではなく、この資料を通して、イギリスはフランスとの覇権争いに勝利すると同時に、自国の商品を売る市場としての植民地を拡大していったことに気づかせる。

### ③まとめ

「アメリカの植民地にはどのような人々が生活していたのか」と問いかけ、植民地を経営するためにアメリカに移り住んだイギリス人をはじめとするヨーロッパ人、西アフリカから送り込まれた黒人、そして、先住民がいたことを確認する。そのうえで、次時には、植民地アメリカの動きについて学習することを予告する。

## 【2時間目】

### ①導入

前時に示した「1763年以降のアメリカ」の地図と新地図帳p.59②「国の成立と移民」を比較させ、イギリス領からアメリカが独立したことを確認する。また新教科書p.136の1行目の記述からイギリスから独立しようとして戦ったのはもともとイギリス人であったことに注目させる。

### ②展開

「なぜ植民地アメリカはイギリスからの独立を求めたのか」と問いかける。生徒は新教科書p.136の「アメリカの代表のいないイギリス議会で新しい税を課すことが決められる」という記述にすぐに気がつくと思われるので、それを踏まえて「イギリス本国の人々とアメリカのイギリス人との違いは何か」と問いかける。この問いによって、自分たちの権利を守るための参政権が認められているかいないかの違いに気づかせたい。

次に、独立宣言を提示し、その内容について解説するとともに、独立宣言が発表された13年後にフランス革命が起こったことを説明する。ここで独立宣言と人権宣言を並べて提示し、「独立宣言と人権宣言の共通点は何か」と問いかける。この問いに対する生徒の意見を整理し、最終的には、すべての人には自由、平等といった権利があること、政府はそのような権利を守るために存在し、主権は国民にあるといった、市民革命に共通する理念をおさえておきたい。

### ③まとめ

フランス革命に対しては革命の広がりをおそれた周辺諸国からの干渉が行われたが、そのことがフランス「国民」としての意識をさらに高めたことを説明し、このような国民という意識を持たせることで人々を一つにまとめた国家のことを「近代国家」といい、今後の学習のキーワードになることをおさえる。